

趙子里先生：

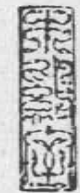
承寄墓誌集釋之收書。所
出校註之富。選之精。校
釋之詳。亦所未見。蓋歷史社
學大有補益。舊存墓誌幾塊。
字刻頗好。勿々拓寄上。不知對
兄有用否？暇時請來一談。
近好！

康生

五六年三月三日

三日

五六年三月三日



〔祝文〕

趙萬里先生：

承寄墓誌集釋已收到、謝々！

此書搜集之富、□選之精、校

釋之詳、前所未見、對歷史科

學大有補益、舊存墓誌幾塊、

字刻頗好、勿々拓寄上、不知對

兄有用否？暇時請來一談

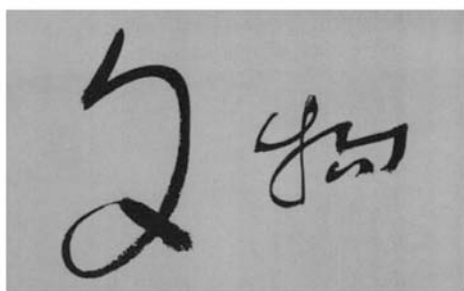
近好！

康生

五六年三月三日

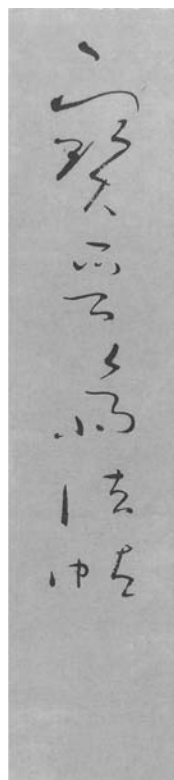
書体鑑賞・「章草体」④ 『康生の手紙』 (現代・1956年)

図版② 学術雑誌『文物』の古い時期の表紙の題字



現代では宋克(1327~1387、字は仲温、明代初期の偉大な書法家である)が、章草体をよくし、清朝後期の金石学の発展にとまらぬ、清末民国期には章草体も研究され、章草体の書法作品をいくらか見ることが出来るようになった。現代中国で章草体を善く学び、優れた作品をのこした人物では、康生(1898~1975、元の名は張宗可、1925年に共産党に入り、1966年には政治局常務委員に新任され、党の第五位にまで上りつめた。文革が終息する前に亡くなっている)を第一に挙げることが出来る。日本の書道界では、康生を知る人はほとんどいないであろう。図版に示した手紙(主図版①)は、趙萬里(1905~1980、北京図書館研究員、善本特藏部主任、人民代表大会代表等の職を歴任)から、『漢魏南北朝墓誌集釈』(漢代から隋代までの墓誌銘の整拓図版を数百点収め、各墓誌銘に対する先人の著録文献を集める。墓誌銘研究のみことな研究図書

図版③ 当時刊行された法帖の題簽



である)を贈られたことに対する康生の御礼状である。著作を誉め、自身も所蔵する墓碣の文字の優れたものを拓して、趙萬里に送り、暇なおりに歓談したい旨を記している。康生は翰墨の趣味があり、実に見事な章草作品を残している。学術雑誌『文物』の古い時期の表紙の題字(図版②)や当時刊行された法帖の題簽(図版③)は、康生の筆であり、草書や小楷も素晴らしい。1997年に北京のオークションで、康生旧蔵の明の宋克筆の見事な章草作品2件、その他に章草法帖数件を目にした。ともに康生の鑑蔵印があり、章草体に並々ならぬ関心を寄せていたことが窺い知られる。政治面の評価は別として、書法面では、現代中国を代表する書法家の一人ということが出来る。

伊藤滋 メールアドレス

mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院 平成の群像 (2015)



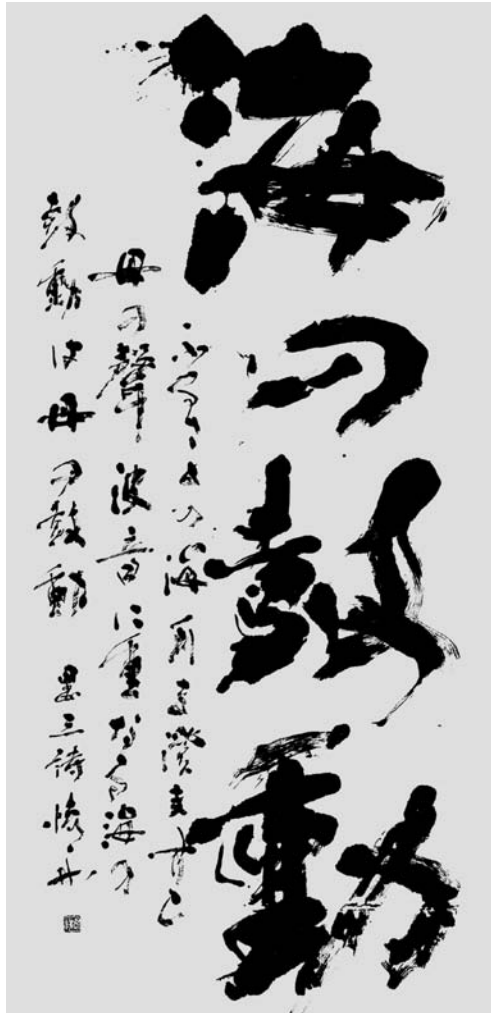
伊藤 懷舟

いにしえ 古の香り

2月になると、よく学生時代のことや脳裏に浮んでまいります。当時、木曜短歌研究会というサークルに所属、奈良を中心に「木短村」という名の合宿をしました。奈良、佐保路・斑鳩・明日香・山の辺の道・

古野・柳生など数多くの寺院、万葉の歌の足跡を、学んだものです。2月の奈良は寒く、観光客もまばらで、静寂な地にたたく寺院を尋ねると、なにか新鮮で我身を見詰める絶好の一時でした。時には僧侶の方々と談話をし、古の時を楽しんだものです。古い写経など拝見し、古筆の魅力に取りつかれたものでした。2月といえば、古都奈良に伝わる「お水取り」という行事があり

ます。お堂の階段を松明をもってのぼり、火の粉をはらう、その火の粉を浴びると、無病息災、一年健康で過ごせるとあって人々が殺到するお祭りです。その時に詠んだ歌が「赫々と籠の松明燃えさかり奈良の都は春のことぶれ」と駄作ですが詠みました。あれから40数年にもなりますが、はじめに目にした古筆空海の「風信帖」に感動したことが、今も忘れることができません。京都の東寺(教王護国寺)に所蔵している風信帖、たまたま目にすることができたことは、此の上もない幸せでした。1200年の香りがただよぶような、墨の色、古紙の耀きに圧倒されたものです。空海は遣唐使として大陸に渡り、仏教をはじめ、ありとあらゆる学問を身につけ帰国。書においても王羲之の伸びやかで雅やかな趣が感じられ、また、顔真卿の肉太の線でどっしりと構えた迫力を感じさせる「風信帖」等も、時を忘れてしまうほど目にしたものです。



我師、穂倉扇舟先生もよくおっしゃっておいりました。「いいもの(本物)を観ることが大切、そこから得るエネルギーは、何にもにも勝るもの無し」とよく申しておりました。数多くの原拓を、弟子である我達に惜し気もなく見せて下さいました。今日あるのも先生のお陰と、深く感謝し、書の道を極めていきたいと思っております。

古の香り、大切に……。

書のひろば

理事長 辻元大雲

公財書道芸術院定例理事会開催 27年度事業計画・予算等決定

3月14日(土)午後、本院定例理事会が開催され平成27年度事業計画、予算案、院展昇格人事ほかが審議され決定した。詳細は院報をご参照いただきたい。

新たな事項として企画委員会の設置及び委員の選考を行い、将来の本院の在り方などにつき建設的な検討を行っていたと予定。委員は原則財団役員、院展参与会員以上のをぞき、各部、総支局のバランスを考慮し、中堅若手審査会員より17名を依頼、任期は2年とした。主担当は下谷洋子常務理事。

11月23日創立記念日恒例の講演会講師は、創玄書道会理事長の石飛博光氏に依頼した。乞うご期待。

書写書道教育振興協議会からの基金出資の要請があり、26年度会計予備費より、所属会員数×500円の要請で本院正会員数(審査会員候補以上約150名)を基礎として75万円を支出することとした。会員個々よりご負担していただくのが本来の趣旨であるが、ご理解いただきたい。書写書道教育の振興を文部科学省、中央教育審議会などへの要請運動を継続して行う目的でありご支

援ご協力を今後もよろしくお願いしたい。
事務局体制の一部変更を行った。事務局長を千葉蒼玄氏から事務局次長であった前田龍雲氏に、書道芸術編集担当を前田氏から群馬の倉林紅瑤氏に交代。また6月に事務員の異動が行われる予定で後日発表する。



書道芸術院事務所での理事会

「書道芸術学生版」監修実施

毎年度末に元文部科学省教科調査官・東京学芸大学教授、毎日書道展審査会員の長野竹軒先生に、本院発行の「書道芸術学生版」の参考手本を中心に監修をしていただいている。本年も3月9日、本院事務所にて院内監修者の広瀬舟雲および編集担当三浦鄭街両氏、理事長立会いのもと行った。
ご承知の通り競書の参考手本は指導者のもとより、生徒児童にとり極めて

重要なものであり、手本執筆をご依頼する際に細かな文字表現に対する指示を添えてお願いしている。学校教育での文部科学省指導要領に準拠することを基本原則として重視して発行している。今回の監修では細部に亘りご指摘をいただいた。今後ご依頼する際に各先生方にお伝えし、貴重なご意見を反映させるべく努力して参りたい。

東京都美術館借館団体説明会

平成24年度より改装後の都美術館が大幅に変更され、会期および部屋数の割り当てが行われ5年毎に見直すことになっている。3月11日東京文化会館小ホールにて都美術館団体代表者を集め平成29年度以降5年間の借館について第1回目の説明会が開催された。

本年度中に資格審査および使用割当抽選がI~IVグループ(資格審査により最優先団体が第Iグループ、本院は前回第IIグループであった。)順に行われ会期・部屋数などが決定することになっている。今回までの使用実績は全て御破算となり改めて申請することになっており関係団体にとり油断のない状況である。対応を誤らないようにしてまいりたい。

全日本書道連盟定例理事会開催

3月12日(木)第156回公益社団法人全日本書道連盟定例理事会が上野精養軒にて開催され、平成27年度事業計画および予算案の審議を中心として行わ

れた。

主な内容として

①書写書道教育推進協議会の活動報告、今後の活動予定など。特に書道関係団体への基金拠出の依頼と協力要請。

②「仮名書道」ユネスコ無形文化遺産登録推進委員会(仮称)への協力。広く日本の書もイメージして運動がすすめられる予定。既に中国の「漢字書道」が登録されており、数年がかりの運動になりそうである。

③任期満了による役員改選。6月5日の総会にて行われる。

その他、講演会、夏期書道大学などは例年通り実施予定。

日中文化交流協会常任委員会

一般財団法人日中文化交流協会では3月24日有楽町電気ビルにて定例の常任委員会が開催された。この委員会は文化芸術、学識経験者、演劇、文学など多方面のジャンルの代表者で構成されており、書道関係では新井光風、大井錦亭、杭迫柏樹、中村雲龍の諸氏と辻元大雲などが委員として参加している。最近の日中関係は政治経済面などで緊張感が漂っているが、文化交流面での公的また民間交流が重要となっていることは言うまでもない。

中国当局の締め付けが厳しくままたないことが多いが、あきらめずに誠意をもって継続することが肝要との意見が多くを占めた。来年2016年は協会創立60周年を迎える。ご支援を。

現代詩文書 (一)

田村鄭雲

前衛書 (一)

太田蓮紅

TO K Y O 書2015に院より推薦頂き、出品致しました。

作品を発表出来る喜びと共に、院を代表することの責任の重さを感じ私にとって貴重な経験となりました。

この欄の掲載にあたり、作品発表までの経緯を記録致します。

作品の構想

大きさの設定

一人10枚の壁面を東京都美

術館で自由に使用して下

さいと言われると、

「余白無く全部書いて

埋めてしまおう。」と

いう、闘争心のような

ものが湧いてきます。

大きい作品を発表出来

る機会は滅多に無いの

で、今回は大作以外考

えられませんでした。

確かに土俵が大きす

ぎて中身が広さに負け

てしまう。この広さを

埋める実力は備わって

いないのは承知で大それた挑戦

でした。

結果はともかく還暦を迎える

お正月の人生の1ページを飾る

作品となりました。

田村鄭雲書



「光と闇」

21世紀の書

—私の主張—

文才のない私にとって6回の連載はどうなることか、思いは数々あれどまとめきれぬのか謎である。原稿を書くにあたって振り返ってみたが、前衛書をいつの頃から書き始めたか定かでない。気がついた時には師の元で墨まみれで制作し、引かれたレールの上をひたすら走り出していたようだ。

前衛書は字のごとく常に新しい表現をし前進することを求められる奥の深い分野である。なぜこんな難解な世界に足を踏み入れてしまったのか、この機会に見直しながらこれからも進むであろう道を見出すことができれば願っている。

書作することに無我夢中になっていた頃、何が良いか悪いかすら見分けがつかず、ただ力まかせに引き込んだ線、それは若さゆえの足跡かもしれない。黒と白の世界・一回性の中で生まれる線のモンスター、このモンスターに現実から創造の世界へと導かれ、自己の想いを託している。ともあれ試行錯誤の連続は今もなお続いている。

太田蓮紅書



平成10年 現代女流展出品「思」

掲載の作品は平成10年「現代女流展」出品のもの。濃墨、長鋒尾脇筆、筆の特質を最大限に活かしたスピード感溢れるものとした。根底にある古典は甲骨の刻むような鋭さも秘めた線である。渴筆が余白に負けないように表現することで、題とした「思」をより強く印象づけようとしたものである。

「結果成自然」

最首 翠風



書道芸術院春華賞

第68回書道芸術院展

〈1〉



漢字部 最首 翠風

この度は「書道芸術院春華賞」を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は師種谷扇舟（書道芸術院元会長）の生誕100年に当り、成田山書道美術館にて記念の大展覧会が、一か月間にわたって開催されました。展示された書や資料をたどりながら、弟子の一人である自らの不勉強を痛いほど感じたのでした。それが私に影響したとは思えません。昨秋より私の作品に、ある勢いがついたかもしれません。

これ迄の形式を変え、墨も手磨りしました。「女流100人展」出品作と、5文字の構成も変えています。

「毎日新聞」夕刊の「書の世界」にもとり上げて頂き、何かを突破している、こうという意欲が満ち満ちている、とのコメントを読んだ時、「書は伝わるもの」の意を強くいたしました。

一人々々の個性を育てて頂いた故種谷扇舟師と諸先生方に感謝申し上げます。

書道芸術院大賞



漢字部 一森 琴映

この度、私のような若輩者が歴史ある書道芸術院展におきまして幸運にも栄えある大賞を頂き、誠にありがとうございます。ご指導いただきました恩地春洋先生、小林琴水先生をはじめ、

玄遠社、書道芸術院の諸先生方、諸先輩方、そして理解ある家族の支えのお陰と深く感謝しております。

今回賞を頂いた書作品の漢詩は、昨年10月に他界した祖母へ冥土の土産として選んだものです。書道芸術院展の出品にあたり、祖母への思いを込めて練習し始めた1枚目を棺の中に入れました。この受賞を一番喜んでくれたのは祖母かもしれません。

まだまだ未熟な私です。書道を続けられる恵まれた環境に感謝し、これからもマイペースに少しずつ書の世界を勉強していきたいと思っております。今後とも、ご指導ご鞭撻を頂きますようお願い申し上げます。

「青山横」

一森 琴映



書道芸術院準大賞



「落つ日の」

仙場美枝子



「同題仙遊観」

福留千代華



「鳴沙降る日」

古谷 天岳

「昇」



大庭 幸石

「夏の午後」



宮本 紅雪



「冬華」

市川 紫泉

白雪紅梅賞



「このゆふべ」

都丸みどり



「便至塞上」

小川 白柳



「月蛾」

柿本 紀子



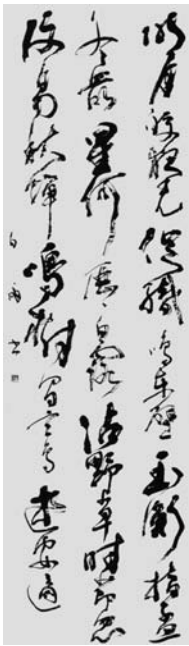
「縁」

小野 朱星



「妙法蓮華經如来壽量品」

目良 珠山



「曲江有感」

西垣 絹香



「徳以道樹礼以仁清」

中谷 大雅



「幸」

門脇 信子

張猛龍碑（北魏）①

漢字研究部臨書課題

Ⅱ（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）

当該古典の左記掲載部分以外も可。

〈解説〉「張猛龍碑」は北魏の正光3年（522）、魯郡（現在の山東省）の太守（長官）であった張猛龍の功績、徳行をたたえるために建てられた頌徳碑である。張猛龍は南陽郡（現在の河南省）白水の人。原碑は今も山東省曲阜の孔子廟内に保存されている。

また「張猛龍碑」は「高貞碑」と並んで北魏の代表的な楷書である。点画は直線的であり、転折が鋭い、いわゆる六朝の方筆で書かれ、雄渾・剛毅な印象を与える。

（編集部）

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

（押印のみも可）

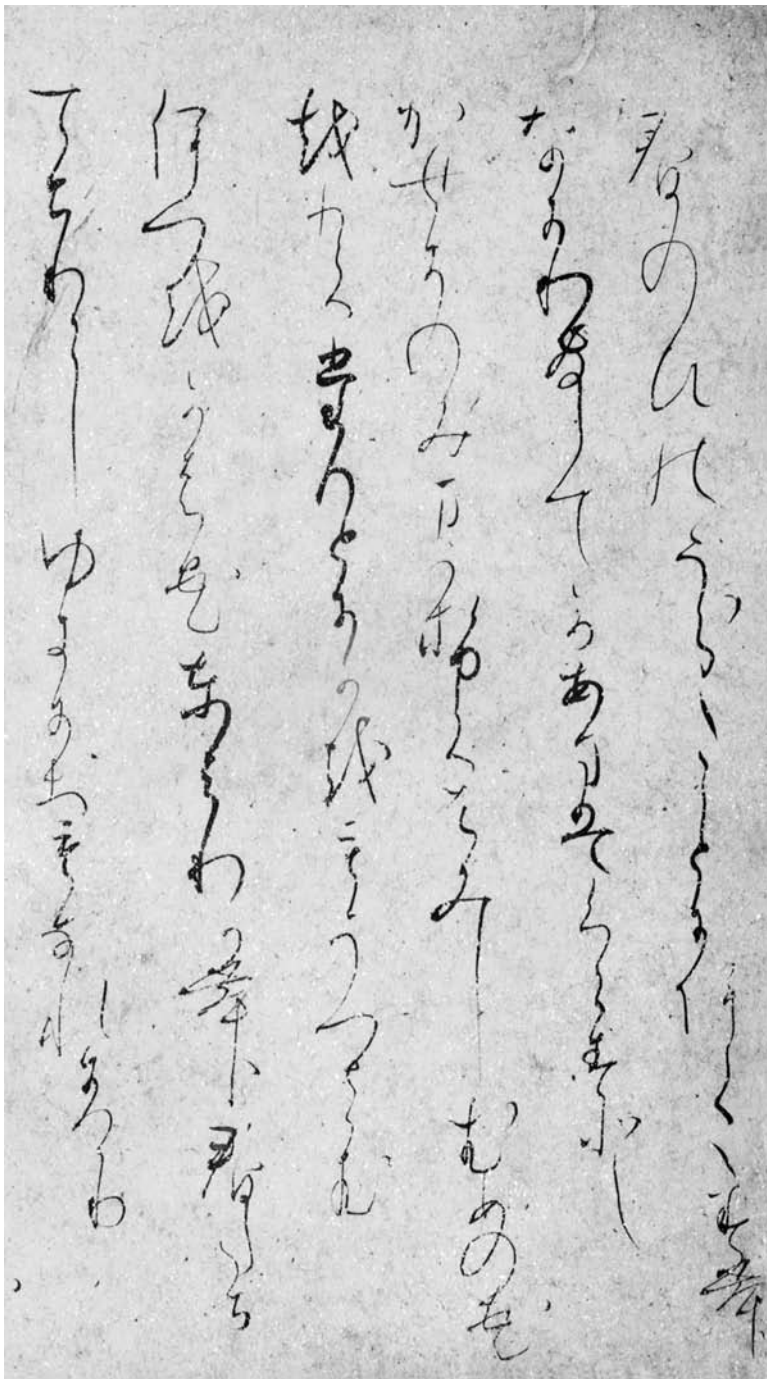


南陽白水人也。其ノ氏族分興。源流所ノ出。故已備詳世録。

重之集

(伝藤原行成)

①



(90%縮小)

かな研究部臨書課題

Ⅱ 別紙を裁断して貼付も可。半横紙は半紙サイズに切って使用のこと。左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部臨書課題

Ⅱ (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可。

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

(押印のみも可)

〈解説〉

源重之(？〜1000ごろ)は三十六歌仙の一人。この伝藤原行成筆「重之集」は、東宮時代の冷泉天皇に重之が求めに応じて和歌を詠じて作成し、献上したものである。春・夏・秋・冬各20首恋・うらみ各10首に「かずよりほかにたてまつる二首」を加えた102首からなる。奔放でリズムミカルに筆を運んでおり、流麗で繊細な筆致で書写され爽快な趣が感じられる。徳川美術館蔵。(編集部)

〈よみ〉

春のひのうらくごとくにいで、みむ
な^不に^不わざしてかあまはくらすと
かせ^耳にのみまかせてはみじむめの花
を^能りて^三たもとにか^可をも^可う^毛つさむ
い^伊づ^能をか^可は^者花^可とは^可わか^可む^多春^多たち
て^利ち^利り^文こ^尔し^毛ゆ^尔き^尔にお^尔も^尔な^尔れ^尔に^尔け^尔り

漢字規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小竹石雲 選書



景趣幽絶

よみ (景趣幽絶)

書体 自由

習い方解説 (一)

小竹石雲

景趣幽絶
(景趣幽絶)

(魏野)

北魏系の瞬発力のある線で表現してみました。

・注意点

外に伸びやかな力が発散するように筆の弾く力を最大限に生かすスピード感と線の切れ味に気を付けた。

景↓景 趣↓趣 絶↓絶

・参考例

温雅な表情

・いろいろな表現方法を勉強しよう。



漢字規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

大隅晃弘選書



天道無親

よみ (天道は親無し)

書体Ⅱ楷書

習い方解説 (一)

大隅 晃 弘

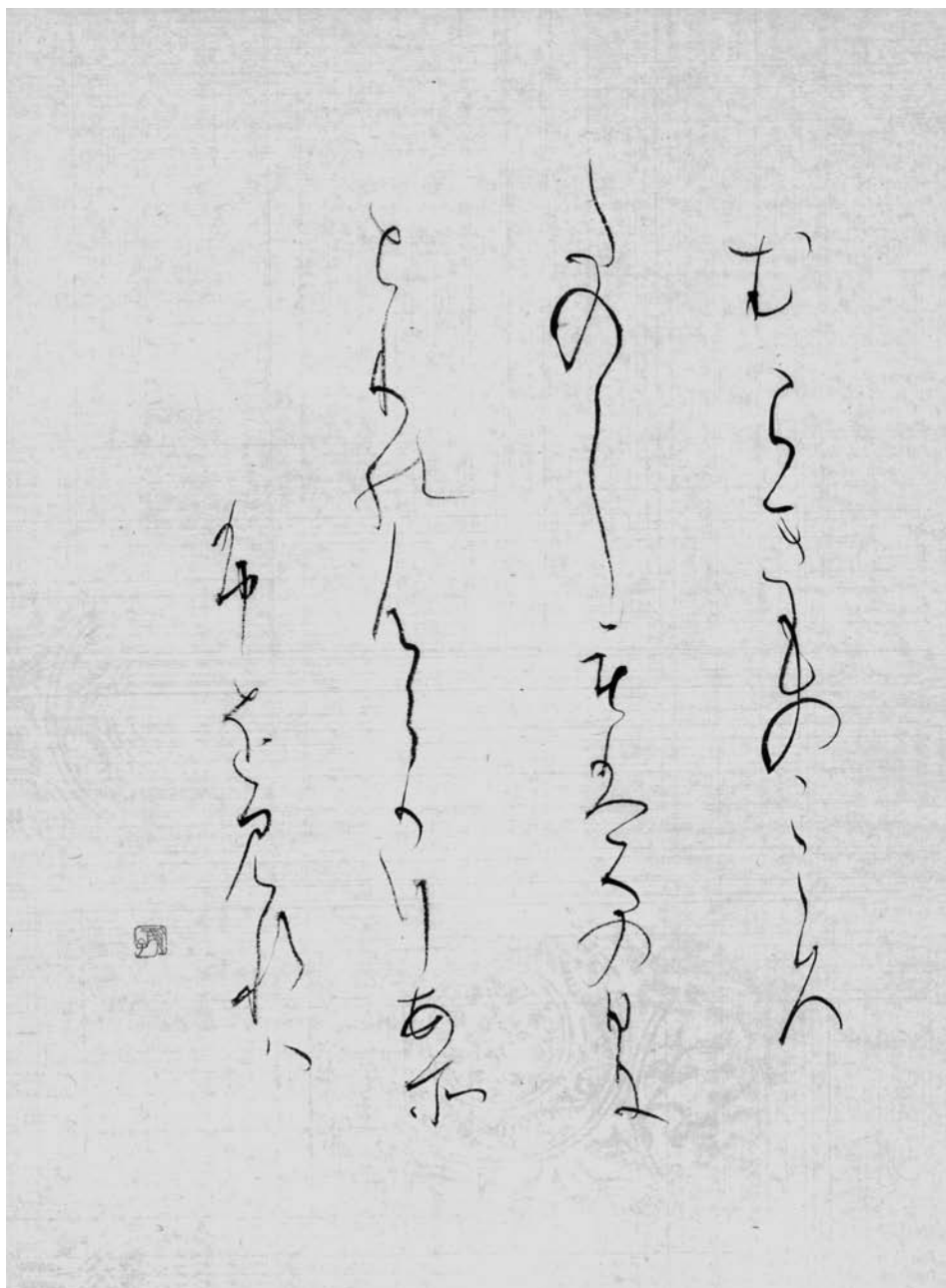
天道無親
(天道は親無し)

(老子)

古典の特徴を引用して創作へと展開する手法は、多様な創作表現を試みる上で大変有効だといえます。臨書に際しては、臨書そのものを最終的な目的とせず、古典の要素をどのようにして創作へと取り入れられるかを意識して取組むことも必要でしょう。

一連の龍門造像記は、その用筆法に明確な特徴を有するため、臨書から創作へと発展するのには、恰好の古典といえるでしょう。基本用筆の様式を一通り学んだら、その成果を発揮すべく、積極的に創作へと挑んでいきたいものです。表面上の刻された刀意に囚われ過ぎると、側筆が目立ち、線質が硬くなります。筆の弾力を十分に効かせて、生きた筆意が表現できるよう努めましょう。

かな規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可) 大辻多希子選書



よみ方
むらぎものころた(多)のしも(毛)は(盤)るの日に(尔)
とり(利)の(能)む(无)らが(可)りあそ(所)ぶ(布)を見れば(八)

創作

習い方解説 (一)

大辻 多希子

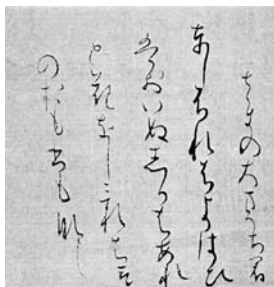
むらぎもの心^{こころ}楽^{たのしみ}しも春^{はる}の日に
鳥^{とり}のむらがり遊^{あそ}ぶを見れば

(良寛)

4月号より6ヶ月間担当します。
1回目は、基本的な4行の構成に
しました。作品を創作する時、最
初は古筆の臨書から始めること
をお薦めしたいと思います。

かなの古筆はたくさんありますが、
創作に慣れていない方には、
寸松庵色紙が良いと思います。
寸松庵には、いろいろな形式があ
りますが、4行や5行の構成の作
品がありますので、初心の方には
良いお手本と考えます。臨書をする
場合、まず単体を学び、少ない
文字の連綿から多い文字へと進み、
全体の造形を把握すると良いでし
ょう。

寸松庵色紙

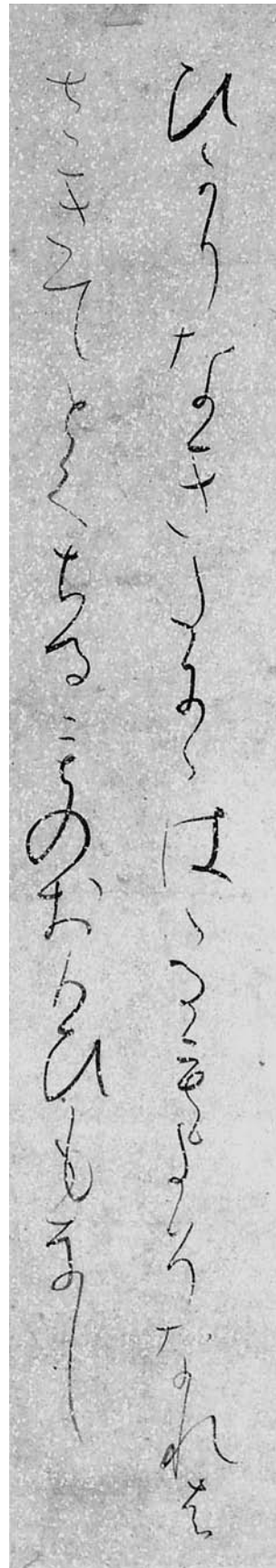


東京国立博物館蔵

かな規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 ひか(可)りなきた(多)に(尔)ゝはゝるも(毛)よそ(曾)なれば(者)さきてとく(久)ちるも(毛)のおも(无)ひもな(奈)し

かな条幅規定 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

見越雪枝選書



よみ方 は(者)る風は(盤)柳のいとを(越)ふ(布)き(支)み(三)だ(多)し(志)庭よりは(者)るゝゆふ暮のあめ(免)

(風雅集巻二春中より)

創作

習い方解説 (一)

見越雪枝

春風は柳の糸を吹きみだし
庭より晴るゝ夕暮の雨
(後伏見院)

1行目に比べて、2行目字数が
少ないので、2行目は1行目より
高い位置から書き込み、終わりの
「あめ」も隣の「みだし」より
長めにしています。響きあいを
心がけました。

難解な漢字、変体がなは使って
いませんので、誤字のないように
しましょう。

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

崎井恵風選書

一枕鳥聲残夢裡
窓花影獨吟中

一枕鳥聲残夢裡 半窓花影獨吟中 (陸游)
(一) 枕の鳥聲残夢の裡、半窓の花影獨吟の中

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

最首翠風選書

日暖帝城春

翠風書

日暖帝城春

(日は暖なり帝城の春)

(杜甫)

書体||自由

習い方解説 (一)

崎井恵風

6ヶ月担当いたします。課題は総て14字で季節に添った詩を選びます。今月は春ののどかな情景を歌った陸游詩です。鳥のさえずり、窓辺の花影、吟ずる詩は何でしょう。ゆったりとした流れの中に、自然な潤濁、字の大小に心がけて表現してみてください。

※たて形式に限る

習い方解説 (一)

最首翠風

4月から「書道芸術」誌にデビューしたばかりの仲間も多いことでしょう。まずは楷書が斉正のスタイルに整った時代、初唐の三大家の一人虞世南の孔子廟堂碑の書風を生かして書いてみました。品格と伸びやかな美しさが抜群の楷書古典です。
段階に応じて、書体も書風も自由楽しんでください。

人は三十にして、自分を馬鹿者ではないかと思う。四十にして自覚し、計画を練り直す。五十にして、不名譽な遅延に怒り、さしなる決意を新たにす。 泰濤書

用紙IIはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体II自由

習い方解説 (一)

牧 泰濤

「人生は、失敗の連続である」と悲観する人が多いと思う。しかし、その都度、「これではいかん」と立ち直って、今がある。いつも自分の言動の不名譽を恥じ、次への決意をもてる人はいつも幸であり、そしてそんな人は決まって元気いっぱいである。

ことばを書いたから元気になるとは限らないが、そんな願いをもって書くことが大切と思う。

何のために字を書くのか。ことばやその内容をよく理解したり、広めたりするために書いているのである。所詮そこには「美」が求められる。字形は各人の容姿が異なるように、異なって当然である。要は、書く人のなりとらしさが表われていれればいい書作である。今の自分の力を信じて自分らしさの字を書いてみましょう。

※落款を必ず入れる。

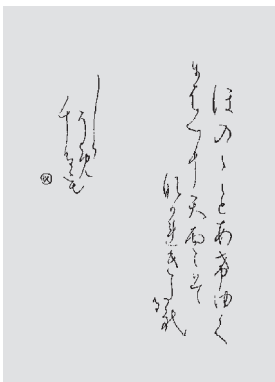
(自分の名前を入れること)

木一プロ作品 各部総評

NO. 646

かな部 師範 梅山 久子

墨色の美しい穏やかな作品。書いている時の筆者の円満な心境が伺え嬉しい。更に創作の工夫を、◎かな部総評 毎回述べています。が、紙面に小さく細すぎる作が多く残念。回りが空きすぎるのは貧相でしかありません。(洋子評)



漢字条幅部 師範 富原 扇水

三行構成の行立てのバランスよく、リズムカルな運筆が紙面に動きを与えている。終行やや軽いか。◎漢字条幅部総評 上級三行書きは筆力ある作と弱い作との差が激しい。基礎力の養成を。下級一行書きも同様。(大雲評)



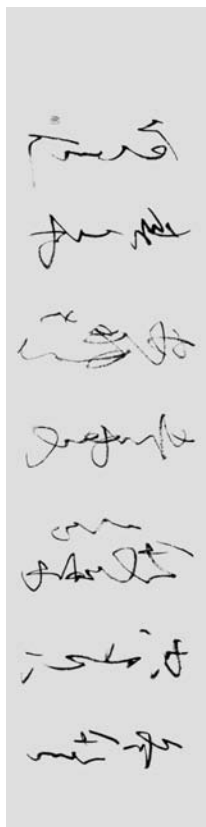
現代詩文書部 特選 森田 藤谷

切れ味良く末端まで充実した線質が、美しい白を生む。作者の情熱が響いている。上品だが力強い作。◎現代詩文書部総評 今回は特選の筆意に苦勞しました。作者の顔が見える快作が多く、驚きました。(鄭雲評)



かな条幅部 師範 濱田 竹雪

過不足のない巧みな表現は見る者に安らぎを与えます。更にはどこかに破れの要素を加味しては？



前衛書部 特選 坂本 寛山

筆の弾性が偶然をキャッチしたかのような作意を感じさせ、接する者の心を揺さぶる効果あり。◎前衛書部総評 制作意図が鮮明な作品多し。印の位置への配慮はさらに一考を要す。(慧香評)



◎かな条幅部総評 字粒の大きさに迷い、過大、過小が散見。冬と雲に字形不明瞭が多く残念。墨量を制御し美しい紙面を。(明子評)

漢字部 師範 宇田川春華

半紙を一つのフィールド(場)としてとらえている特色がある。線質も重厚で深みがある。◎漢字部総評 線質を決定づける要素の一つは墨量である。墨色、紙への心配りも当然大切。それを生かす筆力の鍛練を。(翠風評)



ペン字部 師範 青木 千苑

しっかりとした楷書で点画が充実している。章法もよく全体に力強さの感じられる秀作である。◎ペン字部総評 楷書のしっかりした作品が多かった。周囲の余白がアンバランスな作品があった。余白を考慮することが大切。(蒼玄評)

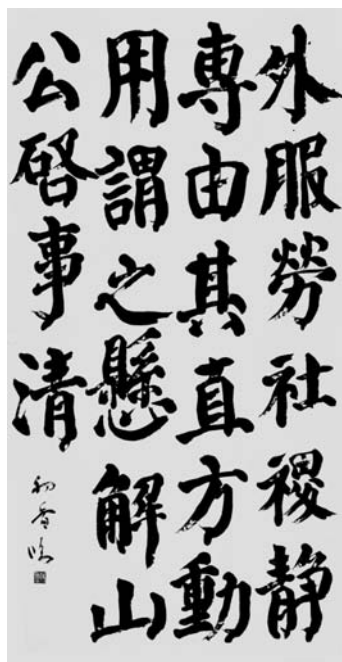
王羲之

遣隋使遣唐使で代表される中国文化の輸入は書では王羲之であり、手師とも称されたりはされた。最も著名なのが「蘭亭序」であり、唐の太宗が熱愛の余り、遺命により殉葬されたのは周知の通りである。千苑書

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

臨書 (高崎) 根津飛龍 「中務集」



135×70cm

佐藤初香臨

◆これぞ顔真卿という筆致に大満足。紙に食い込む表現の力量と漂う雰囲気は作者に会いたいと思わせる。

(明子評)

(倫子評)

◆顔法の重厚感のある線を良く表現して厚みのある作品となった。楷書ではむづかしいがリズム感を出すところに良い。

(蒼玄評)

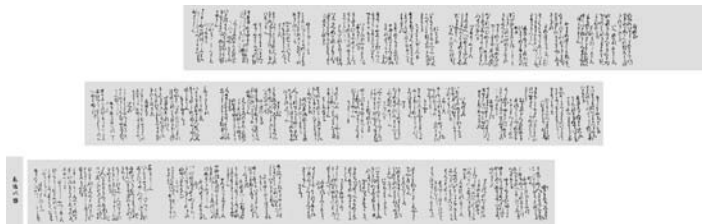
◆顔真卿の楷書中、最も動きを感じさせる建中帖の特徴をよく捉えている。真正面に向き合う姿勢がよい。

(大雲評)

臨書

(昌苑)

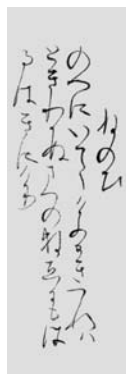
佐藤初香 「自書告身帖」



根津飛龍臨

53×168cm

部分拡大



◆作者の手の中に入っているものなのでしよう。澱みのないタッチは筆、墨、紙と心の高度な調和です。(明子評)
◆よどみなく流れて細部まで行き届いた臨書の秀作である。線は強くきれも良いが繊細さもほしい。(蒼玄評)
◆この長文を始めから変る事なく書きあげる。考えただけでも大変な仕事。安定した表現に敬服。(倫子評)



梅田紅雨書

60×178cm

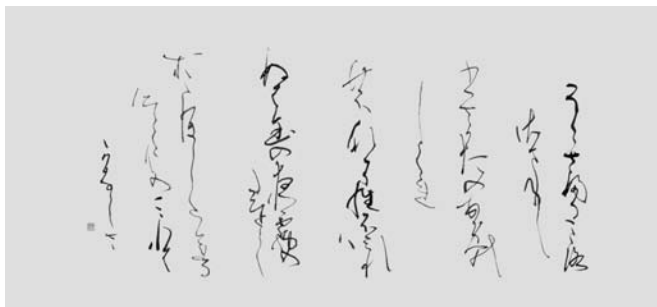
現代詩文書

(翠苑社)

梅田紅雨

「シルエット」

◆直線を基調とした明解な表現。やや粗さも感じるが破筆渴筆をうまく取り入れて楽しい作となった。(大雲評)
◆秘かに私のイメージする現詩とは、これだと思ふ作品に出会えて嬉しい。墨色よく香り高い秀作です。(明子評)
◆破筆を上手に使い濃淡白黒を表現している。構成も二部構成として流れはあるがまとまりは今一歩か。(蒼玄評)
◆後半の草原も…の一群の表現が最後のしめくくりになり全体を引きしめている。すばらしい纏め方。(倫子評)



鈴木朝夫書

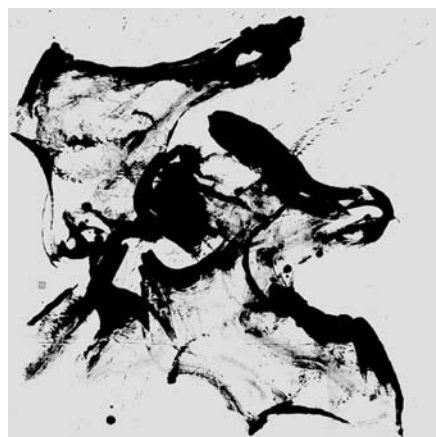
60×131cm

◆無駄の動きのない美しい作品です。中央部分の墨量が深い味わいとなって見事です。印一考されたし。(明子評)

◆穂先の廻転よく利いている表現。うるさくなく筆の流れが見事。紙面のまとまりが一層深まる。(倫子評)

◆和歌二種を連落横に、ややひきしめた筆致で展開する。緊張感ある構成が余白を生かして妙。(大雲評)

◆細線で二首をまとめて清々しさを感じる作である。展覧会作という強いものが多いが、この表現も一つ。(蒼玄評)



小野朱星書

90×90cm

◆大きな呼吸を感じます。濃墨の表現の重さを、かすれの軽さでお互いを生かした構成見事です。(倫子評)

◆大胆な幅広さを感じさせる筆致がエネルギー的な動きを見せている。やや中央部を強調しすぎたか。(大雲評)

◆重厚感で迫ってくる。縁とはそういうものか？連筆の順が追いきれない私はその不思議に魅了される。(明子評)

◆中央の黒と回転する白の美である。飛び散る飛白が動きを出してすさまじいエネルギーを感じる。(蒼玄評)

臨書 (森地) 東平絹子 「自書告身帖」

◆連落に8行の中細字表現は着実ながら微妙な大小の変化も自然で見事。字形など正確な観察眼を買う。(大雲評)

◆大きな雰囲気を持った告身帖をこの形でしっかりと細かい所まで表現。まとめ上げた大変な努力に敬服。(倫子評)

◆中細の楷書を忠実に臨書し細部まで正確な用筆で見事。すっきりとして顔法の圧力はないがこれも一つの臨書か。(蒼玄評)

◆誠実な方の地道な仕事はあっぱれです。どれだけ顔真卿の精神に深く寄り添っているのか驚異です。(明子評)

初因儲為天下之本師導乃元良之教將以本固
必由教先非求忠賢何以容諭光祿大夫行吏部
尚書充禮儀使上柱國魯郡開國公顏真卿立
德踐行當四科之首聲文碩學為百氏之宗忠謹
登于巨節貞規存乎士範述職中外服勞社稷靜
專由其直方動用謂之懸解山公啓事清彼品流州
孫制禮光我王度惟是一有寶貞萬國力乃稽古則
思其人况太后崇徽外家聯屬願先勳舊

135×60cm

東平絹子臨

創作の部(48点)	漢字	3点
かな	5点	
現代	23点	
篆刻	1点	
前衛	16点	
臨書の部(34点)	漢字	31点
かな	3点	
総出品点数	82点	

- 〈特選候補者〉
- 〔創作の部〕
- AI 清水由紀子
- 〔漢字〕
- かな 清水由紀子
- 大雲 佐藤 希雲
- 〔現代詩〕
- 舍人 平塚 美保
- 大雲 小川 白舟
- 大雲 阿部 恵泉
- 恵雅 板橋 雅邦
- 〔篆刻〕
- 桂月 平野 草堂
- 〔前衛〕
- 香書 泉水 香艸
- 大拙 大庭 幸石
- 白珠 蒔苗 由珠
- 連紅 田村 紅紗
- 〔臨書の部〕
- 〔漢字〕
- 大雲 宮原 香扇
- 書游 庄司 咏艸
- 千葉 竹浪 叙舟
- 鳳鳴 後藤 美希
- 樹原 紺野 遊山

漢字研究部
(自書告身帖)

選評 小伏小扇

今月のホープ作品



岩上郁子

漢字研究部 特選 岩上 郁子
筆に墨をたっぷりつけ、横画の力を抜いて軽めに書き、縦画を強めて均衡を保つ法帖の味がよく出ています。向勢の構えで力強く堂々として、見ごたえのある一作となりました。

線の細すぎる作品や淡墨による作品もあり、法帖のもつ特色に目を向けてほしいと思います。それから落款に、○○書と書いた人、氏名のみ、印のみ、氏名も印もないものなどいろいろですが、落款は完成したという証です。○○臨と書きたいものです。作品との調和が第一だと考えますが、提出前に自身の目で確かめてみてください。

◎漢字研究部総評

力強さの中に柔らかさを感じさせる作品も沢山あり、立派だと思いました。少数ですが

謂動之用
京子臨

之用謂懸
守鶴臨

解山公啓事
京子臨

勞社禛靜
万美書

解山公啓
美知書

動用謂懸
竹美臨

京守 萬鶴 竹美 知子 葉子 豊子 一子

事清彼品
翠雪臨

直方
自書告身帖 弘子臨

山公啓事清
清風臨

解山公啓
三枝子臨

外服社勞
三枝子臨

動用謂懸
三枝子臨

三清 弘翠 勇枝 三枝 千介 子風 子雪

山公啓事
柳江臨

謂動之用
柳江臨

啓事
柳江臨

之懸
萬美書

事清彼品
光彩臨

禛靜專由
祥園臨

柳桜 青苑 光鳳 祥園 彩鳳 江扇

謂解之懸
麻叙臨

謂解之懸
真孝臨

禛靜專由
真孝臨

謂之
清風臨

動用謂懸
美楓臨

專由其方
鶴臨

麻叙 真香 美香 千鶴 子楓 子風 翠孝 美

第68回書道芸術院展

併催＝第66回全国学生書道展〈半紙の部 大賞作品〉



(中) 横田夏奈子



(中) 下村彩菜



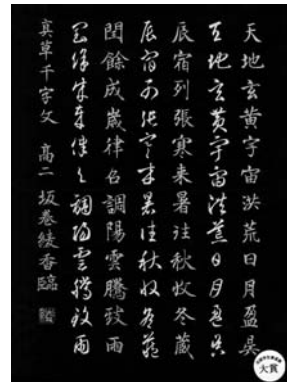
(小) 田中葵



(大) 奥原涉子



(高) 馬門知弘



(高) 坂巻綾香

あいさつ

公益財団法人書道芸術院理事長 辻元大雲

二月の書道芸術院展と同時に開催して三回目となりました。今回は全国各地から半紙作品、半切作品が多数寄せられました。出品点数は半紙部門が少し減少しましたが、半切部門が15%ほど増加し、全体として出品増となりました。ご協力に深く感謝申し上げます。

両部門ともしっかり丁寧に書かれた作品ばかりで、皆さんのご努力に頭が下がります。半切部門の小中学生の作品は課題を書いていただきました。同じ言葉を書くことで字形のまとめ方や、全体のバランスなどがよくわかります。それでも少しずつ雰囲気は違っています。どこに注意して書いたか、気持ちの込め方などが現れます。自由課題の半紙作品も同じだと思います。高校・大学生は古典の臨書や創作、更に新しい現代的な表現などもありました。展示会場で他の多くの方の作品をよく見て勉強してください。

また、皆さんをご指導くださった先生方も同じ半紙大の作品を出品していただきました。漢字・かなのほか、新しい現代詩文書作品や前衛書もあります。更に書道芸術院展に展示された大きな作品は様々な作品が展示されています。よくわからないかもしれませんが、書の作品のいろいろな表現をよく見てください。そして皆さんも大きく成長されたら書の楽しさ、奥深さをぜひ体験してみてください。



〈半紙の部 準大賞作品〉



(小) 武内 美優



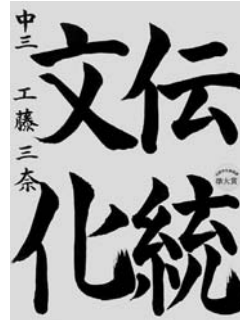
(小) 田村 萌奈



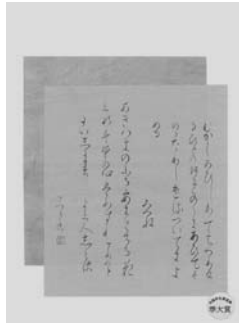
(中) 眞田 みのり



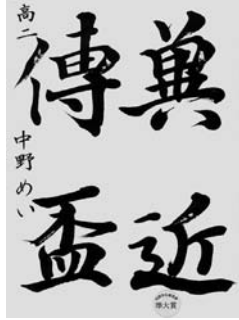
(中) 松田 美春



(中) 工藤 三奈



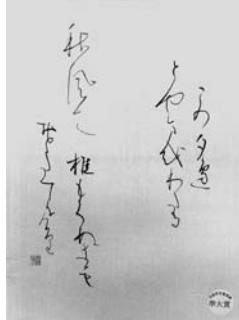
(高) 伊藤 さつき



(高) 中野 めい



(高) 宇田川 春香



(高) 大島 愛美

〈半切 1/2 の部〉



(中) 江尻 姫花



(中) 橋村 音歌



(小) 小菅 玲奈

〈大賞作品〉



(中) 浅桐 真子



(小) 関口 真佑

〈準大賞作品〉



(高) 磯谷 真美



(高) 澤 向 和 奏



(高) 鎌倉 寧々



(中) 大山 秀祐

第66回 全国学生書道展
「指導者作品展」役員作品



「志 (古璽)」
顧問 小伏竹村



「梶」
顧問 香川倫子

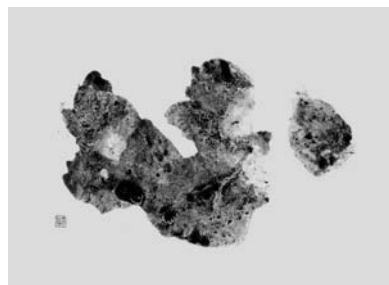


「風」
顧問 恩地春洋

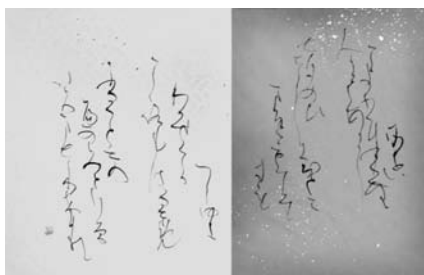
「冰心 (氷のような清らかな心)」
常務理事 大野祥雲



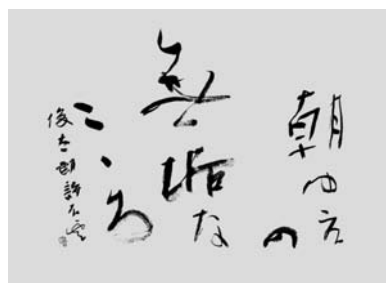
「雲從龍」
理事長 辻元大雲



「心」
顧問 村野大仙



「古今集より」
常務理事 下谷洋子



「朝」
常務理事 小竹石雲